

鶴田 匡夫*

Tadao TSURUTA*

高速フーリエ変換が導入される以前の、フーリエ分光法の黎明期(1950~1965)に、USAにあってその実用装置を設計製作するのに大きな功績を残した人にL. Mertzがいます。彼はプリンストン大学の物理学科を卒業後ハーバード大学で天文学の修士号を取得し、Baird Atomic社、Smithsonian協会天文物理学観測所を経て、Block Associates社に副社長として参加し、そこに1968年ころまで在籍しました。その間一貫して、小型で堅牢なマイケルソン干渉計を高速で走査するタイプのフーリエ分光器の開発に従事し、それらを実用機として地上望遠鏡のカセグレン焦点・気球・航空機・人工衛星などに取り付け、仕様によっては紫外域までを含む、主として赤外域の天体観測に成功したのです。

彼は、成果の公表という点でたいへん気紛れだったように見えます。内外の会議では発表するが論文にできなかったり、成果をJ. Opt. Soc. Am. のBlock Associates社広告欄に掲載したり、その一方で自分の仕事を中心に著書、「Transformations in Optics, Wiley, 1965」を出版するといった具合です。

定期刊行の学術誌に掲載されるためには、原則として査読者の審査を必要とし、それには研究の目的、それを達成するための手段、得られた結果と考察等を、ほぼ決められた様式に従って杓子定規に記述しなければなりませんし、間が悪ければ査読者がライバルの研究者にあたるかも知れません。

しかし、彼がいちばん避けたかったのは査読ではなかったかと、私は想像します。当時彼が国家プロジェクトに参加する企業で働く技術者だったこと、そのため刊行されるまで秘密にしておきたい内容が事前に漏れることを特に恐れたのでしょう。或いは何らかの理由で査読者から修正を指示されることを嫌ったのかも知れません。ともあれ彼が残した資料からは「これこれの工夫を凝らした装置を使って、いつどんな衛星に積んで、このような結果を得た」といった客観的な事実が、国家機密にかかわるとはいえ必ずしも明確に伝わって来ないのです。これらの欠落を同時代人々が書いた論文の中の断片的な言及で補うのは相当に骨の折れる仕事です。

一方、広告欄に業績を公表する利点は沢山ありましようが、最大のもは「書きたいことだけ書いて、しかも印刷、発行されるのが通常の投稿と比べて格段に早い」ことでしょう。一方欠点の方は、「投稿論文と比べて読者の目に触れる機会が少ないことと、資料としての保存や検索に難がある」ことでしょう。ちなみに引用する場合には、例えばJ. Opt. Soc. Am. 54, No. 12, P. iv(1959)と書くようです。当時J. Opt. Soc. Am. の広告欄はローマ数字でページ表記されていました。

Block Associates社はL. Mertzの署名記事だけでなく、いろいろな技術開発の成果を同じ広告欄に研究者の署名入りで掲載しました。独自に技術誌を出版したりパンフレットを配付するよりも遥かに安上がりで効果的な媒体として学術誌を利用したといえそうです。例えば、私の手許にあるJ. Opt. Soc. Am. の1963年10月号には、その年の7月20日にあった日食時の、気球に搭載した赤外干渉計によるデータと解析結果が載っています。同じ雑誌の寄書欄に掲載された論文の受理日が1月と4月であるのと比べて速報性ははずば抜けています。

ここで、学術誌の広告欄を論文発表のメディアに利用するという40年前の発想が、現在のインターネット上にホームページを開くことと、長所・短所をふくめて非常によく似ていることにあらためて気が付きます。インターネット全盛の時代に彼等の試みを追跡してその極めて長期的な効果を検討するのも一興かと思えます。その中には、査読のなかった論文は学術的価値が小さいか、といった深刻な問題も含まれるでしょう。

* (株)ニコン (〒100-8331 東京都千代田区丸の内3-2-3 富士ビル)

* Nikon Corporation, Fuji Building, 3-2-3 Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8331